聖　書：コリント人への手紙第二 1：21〜2：4
説教題：涙ながらに手紙を
日　時：2024 年 9 月 22 日（朝拝）

このコリント人への手紙第二はパウロがコリント人に対して使徒としての自分を弁明している書です。弁明と言っても単に自分の名誉回復のためではありません。これは彼が宣べ伝えているイエス・キリストの福音のための弁明です。コリント教会はパウロの第二次伝道旅行によって建てられた教会でした。パウロたちがそこを去った後、パウロたちを批判し、別の福音を語る自称大使徒たちが現れました。ですからパウロはこれを無視できないのです。コリント人たちがパウロから聞いた真の福音に立ち続けるために、そして神の救いと祝福に生かされ続けるために、パウロが自らと自らの福音について語っているのがこの手紙です。

そのパウロ批判の材料となっていたのが彼の宣教旅行変更に関することでした。そのことが前回の 15〜16 節にありました。パウロはその時、アジアのエペソにいました。彼としてはもうしばらくエペソでの活動を続けて後、マケドニアを通ってコリントへ行く予定でしたが、コリントへ遣わしていたテモテが帰って来てコリント教会の状況が悪化していることを告げました。そこでパウロは急遽コリントへ赴きます。その時、彼らに告げた予定が 15〜16 節の内容です。すなわちまずコリントへ行き、それからマケドニアの諸教会を訪ね、その後でもう一度コリントへ帰って来てユダヤ・エルサレムへ遣わされるというものです。ところがコリントへ行った時、予想外の事態が起こりました。そこにいたパウロの反対者が公然とパウロを非難し、罵倒したようです。その混乱の中でパウロは一旦身を引きます。予定ではコリントを出た後、再びコリントへ戻って来ることになっていましたが、パウロはそうせず、エペソへと戻りました。そこで反対者たちは声を上げたわけです。そら見たことか！彼の言うことは当てにならない。彼はコリントに戻って来ると言ったのに戻って来ない。彼は簡単に約束を破る男だ。「はい」と同時に「いいえ」を言うような不誠実な人間である。どうしてあのような男を信頼できようか。どうしてあれが使徒だろうかと。この批判に対してパウロは弁明しています。

その際、彼は 18 節以降で神の真実に訴えました。パウロたちは神から遣わされて神の子キリスト・イエスをコリント人たちの間でも伝えました。このキリストは、神

の約束の成就であるお方です。神はこのキリストにおいて、ご自身のこれまでの約束のすべてを成就されました。この神の真実を賛美して、私たちは「アーメン」と言うのだと述べました。このような神の真実に触れ、感謝している我々、そしてこの福音を宣べ伝えている我々が、どうしてあなたがたに対して不誠実であるようなことがあるだろうかとパウロは言っているわけです。真実な神の福音を真実に宣べ伝えている私たちの言葉は、たとえ福音そのものを語る時でない場合も同じように誠実な言葉として受け止められるべきではないかと。

今日の最初の 21～22 節も、引き続き神の真実についてパウロが語っている部分です。まず 21 節前半に「私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保っているのは神です」と言われています。神はご自身の約束をキリストにおいてことごとく成就することにおいて真実であるばかりでなく、私たちをキリストのうちに堅く保つことにおいても、ご自身の真実を現しているとパウロは言います。ここに私たちをキリストのうちに堅く保っているのは神であると言われています。私たちは自分で自分の信仰を保っていると思っているかもしれません。必死にイエス様にしがみつき、自分が自分の信仰を支えていると。しかし私たちをキリストのうちに堅く保っているのは実は神であると言われています。パウロたち使徒たちをも、またコリント人たちをも、また今日の私たちをも、キリストのうちに堅く保っていてくださるは神なのです！しかもこれは現在時制で語られていますから、神は今日も継続してそうしてくださっているということです。ここにも神の真実があります。

さらに聖霊に言及されます。「私たちに油を注がれた方は神です」と。そして 22 節では聖霊の役割について二つのことが言われます。それは「証印」と「保証」です。この聖霊の二つの役割については、今年のペンテコステ記念礼拝でエペソ書 1 章 13～14 節から説教した時にもお話しました。そこにも聖霊について「証印」および「保証」という言葉が出て来ました。またそれ以外の時もしばしば触れていますので、今日はここは簡単に見るにとどめたいと思います。証印とはシールのことで所有者を示すスタンプのようなものです。神は私たちに聖霊を与え、私たちをご自身のものとするというスタンプをくださっています。私たちは今や神のものとして神の絶対的な守りと保護の下にあります。一方の「保証」という言葉は手付金という意味の言葉です。エペソ書 1 章 14 節では「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です」と言われていました。天国のことは本来、天国に行ってからでないと分からないはずです。しか

し聖霊は手付金なるお方です。手付金とは、支払うお金全体の中の一部を構成するものです。車や家を買う時の頭金、前払い金をイメージすれば良いと思います。それは支払う総額の一部です。つまり聖霊は将来の天国の祝福の一部を前もって今ここにいる私たちに届けてくださっているお方であるということです。救いの最終的な祝福の前味を今ここで味わわせつつ、最後の完全な救いに至るように導いてくださっています。神はそのような聖霊を与えて、私たちが最後の救いに確実に到達できるように真実に導いてくださっています。このような神を見上げ、神の真実を味わわせていただいている私たちなのに、どうしてあなたがたに何かを語る際、不誠実にそれをするというようなことがあるだろうかとパウロは言っているのです。真実な神を礼拝し、宣べ伝えている者たちとして、私たちは誠実に歩んでいるし、あなたがたに語った言葉もそうなのだとパウロは述べているわけです。

　ではなぜパウロは当初伝えた予定を変更したのでしょうか。そのことが 23 節以降に記されます。彼はそこで「私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います」と言います。つまりこれから語ることは大事なことであり、ウソ偽りがないことを強調するためでしょう。彼が計画を変更してコリントへ行かなかった理由は何なのか。それは「あなたがたへの思いやりからです」と彼は言います。これはどういう意味でしょうか。このあたりのことは使徒の働きに記録されていないため、私たちはこの手紙にある情報をかき集めて知る以外に方法はありません。そのようにして分かることは、突如行った前回のコリント訪問は悲しい結果に終わったということです。2 章 1 節の「あなたがたを悲しませる訪問は二度としない」という言葉は、前回の訪問が不調に終わったこと、お互いに悲しい思いをする結果となったことを示しています。そして参考になるのは 13 章 1～2 節です。そこでパウロは「私があなたがたのところに行くのは、これで三度目です」と述べた後、2 節でこう言います。「以前に罪を犯した人たちとほかの人たち全員に、私は二度目の滞在のとき、前もって言っておきましたが、こうして離れている今も、あらかじめ言っておきます。今度そちらに行ったときには、容赦しません。」　実はここで「容赦する」と訳された言葉と、今見ている 1 章 23 節の「思いやる」と訳された言葉は同じです。つまりこの思いやりとは容赦すること、彼らの罪をすぐには罰さないことを意味していることが分かります。さらに 13 章 10 節にこう書いてあります。「そういうわけで、離れていてこれらのことを書いているのは、私が行ったときに、主が私に授けてくださった権威を用いて、厳しい処置をとらなくてもすむようになるためです。この権威が私に与えられたのは、建てる

ためであって、倒すためではありません。」　まさにここにある通り、パウロが考えていたことは、使徒としての権威を用いて厳しい処置を取ることをしなくて済むようにしたいということです。もしパウロがすぐにコリントを訪問したら戒規のようなことを行わざるを得ませんでした。それはこのタイミングでは良いことにならないとパウロは判断したのです。そこで彼はコリント訪問を延期し、冷却期間を置いたのです。それが新改訳が「思いやり」と訳している背後にあるニュアンスです。

24 節はパウロが権威をちらつかせて脅していると誤解されることがないようにするための言葉です。「私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから」と。パウロは使徒としての権威を使って、上から支配しようとする者ではありません。後に出てくる自称大使徒たちは反対に人を支配したがる人たちだったようです。そうではなく、パウロたちはあくまでコリント人の喜びのために、彼らの祝福のために協力して働く者たちです。コリント人たちは主への信仰に堅く立っている人々であり、彼らの主はキリストのみです。ですから誰か他の人によって支配されるようなことがあってはなりませんし、パウロたちもそれは望んでいません。パウロは彼らがあくまで主につながり、主を主とする信仰に生きるために協力して仕える者だと言っています。これは今日も教会のリーダーたちが良く覚えていなければならない大切な原則だと思います。

2 章に進んで「そこで私は、あなたがたを悲しませる訪問は二度としない、と決心しました」とあります。すぐに訪問したら戒規のようなことを行わなければならなくなり、それはコリント教会にさらに深い悲しみを与えることになります。ですからパウロは今回の訪問は避けたのです。2 節は一見分かりにくいですが、まず真ん中の部分を外して読めば、全体の意味は分かりやすいと思います。すなわち「もし私があなたがたを悲しませるなら、・・・だれが私を喜ばせてくれるでしょう。」　パウロはコリント教会との良好な関係を望んでいます。彼らを悲しませたらパウロも喜べません。では真ん中の「私が悲しませているその人」とは誰のことでしょうか。ここは解釈が難しいところですが、おそらくこれはパウロに反対して立ち、パウロを批判した人物のことと思われます。パウロが悔い改めを迫る相手の人です。その人が悔い改めればパウロに喜びがもたらされますが、そうでなければ今の段階ではコリント教会全体を深く悲しませるだけになるとパウロは案じています。

3 節の「あの手紙」とは、いわゆる 3 通目の手紙のことで、この後 4 節で言われる「涙ながらに」に書いた手紙のことです。次の訪問が再び悲しみの訪問とならないように、コリント教会が喜びをもってパウロを迎えられるように、パウロはその手紙を書きました。3 節後半の「私の喜びがあなたがたすべての喜びであると、私はあなたがたすべてについて確信しています」という部分は、その手紙を通して喜ばしい結果がもたらされることをパウロは期待していましたし、そうなればそれはコリント人たちにも喜びをもたらすだろうとパウロが確信していたことを表しています。

そして 4 節に「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらにあなたがたに手紙を書きました」とあります。このようにパウロはすぐに訪問するよりも、まずは手紙を書き送る方が良いと判断しました。彼は計画を変更してただコリントへ行かなかったのではなく、このような方法で彼らとの関係回復を模索したのです。「それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を、あなたがたに知ってもらうためでした」とパウロは言います。彼は決して、彼らへの愛を証しする甘い言葉ばかりが並べられた手紙を書いたわけではありません。この三通目の手紙は失われた手紙で、今日の私たちは読むことができませんが、その内容は 7 章 8〜9 節から伺い知ることができます。そこにこうあります。「あの手紙によってあなたがたを悲しませたとしても、私は後悔していません。あの手紙が一時的にでも、あなたがたを悲しませたことを知っています。それで後悔したとしても、今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちから何の害も受けなかったのです。」　つまり一言で言ってそれは悔い改めを求める手紙でした。ある意味で厳しい内容だったと考えられます。ここに難しさがあります。一方では彼らに悲しみを与えたくないという愛の関心がパウロにはあります。しかし一方では、罪に対して、誤った生活については正さなければならないという義の関心、道徳的な関心があります。この両立が難しいわけです。そこでパウロは大きな苦しみと心の嘆きをもって書きました。エペソ人への手紙 4 章 15 節に「愛をもって、真理を語り」という言葉があります。真理が大事と言ってただ真理だけを高く掲げ、相手に厳しく接してもダメです。逆に愛だけを高く掲げて、真理をいい加減にし、何でもありであるかのように語るのもダメです。パウロは相手に悔い改めを求めつつ、自分の愛を明らかにする仕方で、その手紙を書いたのです。反対から言えば、愛しているからこそ、この厳しい

ことを言っているということが伝わるように苦心し、涙しながら書いたのです。ここにパウロがコリント人たちに対して誠実であることは明らかです。確かに訪問計画は変更されました。しかしそれは彼らを思うがゆえでした。なのに表面的なところを取って、パウロは言っていることとやっていることが違うとか、彼は不誠実だ！などと批判するのは的外れです。それがどんなにパウロを悲しませ、またコリント教会をも悲しませたことか。またパウロの福音を危うくさせ、偽りの福音を引き入れる素地を作ったことか。そんな彼らに対して何とパウロは身を低くして訴え、弁明していることでしょうか。

今日のまとめとして以下の二つのことを思わされます。一つは私たちはもちろん使徒パウロは直接的には知りませんが、このパウロのように私に関わり、仕えてくれた人がいるのではないかということです。忍耐をもって、私の喜びのために、協力者として、福音を伝え、仕えてくれた人がいるのではないか。もしかすると私たちは部分的なことしか知らないのに誤解したり、疑ったり、自分勝手な考えでいい加減なことを言ったりしたかもしれません。そんな私たちのために陰で涙し、苦悩し、心と体をささげて仕えてくださった導き手、あるいは兄弟姉妹がいたのではないでしょうか。その方々にお世話いただいたことを思い出し、感謝したいのです。その方々の涙と労苦があっての今日の私です。ですからもし自分にもこのコリント人に似たところがあると思うなら、そうならないようにと戒められたいと思います。自分勝手に、表面的なところを取り上げて、誤った言動を取ることがないように。悲しみを増し加えることがないように。むしろともに主にある者たちとされている感謝と喜びの内に、互いへの信頼と共感と理解をもって真実な神に喜ばれる歩みをささげる者たちとされたいと思います。

そしてもう一つは、自分があずかって来た恵みに感謝して、自らもまたパウロの後に続く者として生きるということです。心から誠実に仕えても、彼のような攻撃を受けることがあります。誤解されたり、中傷されたり、罵倒されることさえあるかもしれません。その時どうするでしょうか。怒るでしょうか。やり返すでしょうか。そのような人は無視するでしょうか。関係を切り捨てるでしょうか。しかしパウロはそうしませんでした。彼は相手の真の益を願って仕えています。相手を悲しませるのではなく、喜びのために仕えたいと願い、そのために心と体をささげています。私たちも同じようにしていただいた者たちとして、今度は私たちが、いくらかでもそのように

する者たちへと導かれたいと思います。それは言うまでもなく主イエス様のお姿を映し出すものです。私のために仕えてくださった先輩の信仰者たちは、その姿をもって主キリストを私たちに伝え、その恵みを担い運ぶ器となってくださいました。そのことを感謝して、私たちもその後に続く者となり、そうして主の教会が建て上げられて行くように、そして主の栄光が現されるように、自らをささげ、用いられる者とされて行きたいと願います。